

# 医師と看護師の連携に基づく 患者指導, 臨床研究

藤田医科大学医学部 アレルギー疾患対策医療学講座

教授 松永 佳世子 先生

看護師/皮膚疾患ケア看護師/CAI 久野 千枝 さん



藤田医科大学医学部アレルギー疾患対策医療学講座では、アレルギーの原因解明やアレルギー患者さんの検査法の開発、アレルギーの発症予防や治療法の開発といった研究を、全国の病院、クリニック、研究所、企業などと連携を取りながら進めている。

ここでは、同講座教授の松永佳世子先生、看護師の久野千枝さんに、現在の研究内容や医師と看護師の連携、臨床の場での看護師教育のポイント、看護師の多彩な役割などについてお話をうかがった。

## アレルギー疾患対策医療学講座での 臨床研究

講座では現在どのような研究をお進めなのでしょう。

**松永** 私は、2016年3月まで藤田医科大学医学部の皮膚科学講座教授を務め、同年4月からは、藤田医科大学医学部に寄附講座として設置されたアレルギー疾患対策医療学講座の教授に就きました。当講座では、アレルギー疾患の原因アレルゲン解明、検査方法の開発、治療と発症予防の対策などについて研究を進めています。また、全国の病院、クリニックと連携して共同研究を行っています。



松永 佳世子 先生

久野さんは講座ではどのようなことをされていますか。

**久野** はい、こちらの講座では接触皮膚炎や即時型アレルギー、アトピー性皮膚炎などの研究を共に行っています。

また、松永先生が外部の医療施設に訪問される際には同行して、研究や皮膚科看護師の教育、講演を行っています。その他には薬学部の大学生への接触皮膚炎に関する講演、学会発表、看護師に向けた皮膚、アレルギーの検査方法に関する講演、患者さん向けのアレルギー講演等を行っています。

## 現在進行中の多職種による研究

多職種共同で進められている研究には  
どのようなものがありますか。

**松永** 現在、研究報告のまとめに入っているため詳細は明らかにできませんが、医師だけでなく、看護師、薬剤師が連携してアレルギー疾患の早期診断と患者QOL向上のためのガイドンス作りを進めています。これは、患者さんに直接役立つ研究であり、その成果を全国に広げたいと考えています。

その中で、久野さんは看護師がかかわる部分をまとめています。全国のクリニックの看護師を対象に、どのような課題があるか、課題の解決をどのようにしているか、どのようなデバイスが必要か、などの調査を行っています。

この他、医師、看護師、関連企業、研究機関との共同研究も進めています。

## 皮膚疾患における医師と看護師の役割

**松永先生は医師と看護師の連携を重視されているとうかがっております。**

**松永** 私に限らず、皮膚科領域では、医師と看護師が連名で論文を発表する機会が比較的多いと感じられます。もちろん、医師と看護師、それぞれの学会があり、発表の場があるのですが、皮膚科領域には医師と看護師が共同で進める研究が比較的多いため、連名の論文もみられるのだと思います。実際、久野さんは日本皮膚科学会の正会員で、学会誌に論文を出せるようにしています。私自身も久野さんから学ぶことが多く、「目からウロコ」と感じることも少なくありません。

個人的な話になりますが、私は高校時代に米国に1年間留学しました。その時のホームステイ先の娘さんが、ジョージタウン大学の看護学部在籍していました。話を聞くと、米国では看護師の職責や看護の質が高く評価されていることが分かり、非常に感銘を受けたことが、医師と看護師との連携を重視する出発点だったようにも思います。

私は医師になりましたが、医師はリーダーシップを発揮して全体の責任を負わなければなりません。一方では、医師にしかできないこと、看護師にしかできないこと、さらに両者が協力し合ってできることがあります。互いに尊重しながら、患者さんの治療にあたるのが非常に大切であると考えています。

**医師と看護師の治療の現場での連携について教えてください。**

**松永** 医師が適切な外用薬を処方しても、患者さんがきちんと塗っていないと症状は改善しません。そのため、塗れていない要因を検索して是正することが必要になります。しかし、診察時に医師が観察し、また患者さんが医師の前で話せる時間と表現には限界があります。そこで、久野さんのような経験豊富な看護師に、「もう1度塗り方を指導してほしい」と依頼します。経験豊富な看護師であれば、塗り方の指導をしながら塗れていなかった要因を聞き出し、医師にフィードバックしてくれます。

医師でないと治療薬の処方できませんが、処方しただけでは治せないのが皮膚疾患です。その意味で、皮膚科は看護師の活躍が重要となる領域だと思います。

**患者さんの背景を知るという意味でも看護師の役割は大きいですね。**

**松永** その通りです。家庭環境も治療に影響します。家庭

の問題で悩んでいて、それが病勢に影響することもあります。経験豊富な看護師であれば、事情をうまく聞き出して対策のきっかけを作ってくれます。

## 皮膚科看護を究めるということ

**久野さんとはご一緒に長く皮膚疾患に取り組まれて来たのでしょうか。**

**松永** 私が皮膚科学講座の教授を務めた17年間のうち11年間は、久野さんがトップの看護師として、アレルギー疾患から救急対応まで幅広く務めてくれました。とても良い関係が築けていると思っています。皮膚科学講座退職後、アレルギー疾患対策医療学講座を立ち上げた時には、希望して現在の講座に異動してくれました。

**大学病院では看護師のローテーションがあります。**

**久野** やはり他科への異動の話はありました。しかし、皮膚疾患看護は経験と知識が重要であり、経験と知識を後輩に指導していくことが患者さんの利益につながると考えたため皮膚科に留まることを希望しました。

**松永** 大学病院では皮膚科の教授に看護師を自分の講座に留めておく権限はないので、何度か看護部に相談し、久野さんを皮膚科に残してもらいました。もちろん、皮膚科在籍中も、救急外来や当直業務はきちんとこなしていて、大学病院看護師としての役割は十分果たしていたといえます。

ただ、久野さんは皮膚科に定着する前は、消化器、循環器、神経内科、脳外科、呼吸器科などをローテーションして、全身管理の経験があったことは皮膚科でも非常に役立ったと感じています。

**久野さんがアレルギー疾患対策医療学講座に移られたきっかけを教えてください。**

**久野** 皮膚疾患ケア看護師制度ができる前から、松永先生からアレルギー疾患の総合的な認定制度ができるのではな



久野 千枝 さん

いかと聞かされていて、皮膚科看護を究めるためにも、制度ができれば認定を受けたいと考えていました。また、本講座であればこれまでの皮膚科での経験も活かせるという考えや、松永先生と一緒に仕事がしたいという思いもありました。

### 皮膚科看護を究めるということは、患者さんや後進の指導のために知識を深めたいということでしょうか。

**久野** はい、皮膚科では日々新しい治療が増えています。私自身もっと学習が必要です。患者さんや後進の指導も究める目的の1つだと思っています。また、最近はパッチテストやプリックテストなどを医師、薬剤師とのチーム医療で行うようになっていきます。多職種連携のための知識や経験を深めることも究める目的だと考えています。

## 治療現場での看護師教育の進め方

久野さんは、治療の現場でどのように後進を教育されていますか。

**久野** 看護師の教育では、まず私と看護師の2人で患者さんの指導を行い、指導の手順を一通り理解してもらいます。その後は、当人が患者指導した後に、「どのように指導したか」「患者さんの反応はどうだったか」を質問し、患者さんの反応から、どうするのが良かったのかやどういった問題がありそうかなど、私の経験も踏まえて一緒に振り返ります。そうやって看護師が自分で患者指導について考察し、専門性の高い看護を提供できるようになるよう教育しています。

病棟では、皮膚科の経験があまりなく、皮疹の見方の知識が十分でない看護師も多いため、現在の皮疹の状態の見極め方、外用薬の必要性の有無の判断、状態別の外用薬の使い分けなどについて指導しています。入浴時の患者指導時には、患者さんがスキンケアを適切に実施できているかをアセスメントできるように指導しています。アレルギー検査では、パッチテスト・プリックテストについて準備、介助の方法を指導しています。

## 患者満足度の向上を考えた治療

患者満足度を高めるにはどのようにすれば良いでしょうか。

**松永** 一言でいうと「早く、きれいに、親切に」ですね。それにもう1つ付け加えるとすると「経済的に」でしょうか。私は

常に「早く、きれいに、親切に」を念頭に治療にあたってきました。この原則は、どの診療科であっても変わらないと思います。おそらくどなたでも、医師にかかった時に早くきれいに治してもらえればすごく嬉しいと感じると思います。「親切に」については、かつてのパターナリズムに基づく医療の時代には、「不愛想だけれど、腕が良い」という医師も多かったように思います。一方現代では、患者さんの思いをくみ取り、病気そのもの以外に患者さんが抱えている悩みをきちんと把握することが重要になっていると思います。

言い換えれば、患者さんの満足度には多様な要因が関与しているけれど、その根本は的確な診断と治療ができることであり、難治の患者さんに対しては粘り強く寄り添う姿勢を示すことが重要であるということでしょうか。

## 看護師によるトリアージの重要性

久野さんは全身管理の経験がおありだそうですが、その経験は皮膚科でも活かされていますか。

**久野** 救急科での経験から、多職種による連携の重要性を学びました。また、ばんたね病院のようにハイリスクの患者さんが受診される施設では、看護師によるトリアージが非常に重要です。この点でも救急科での経験が活かされています。トリアージは、経験しないとなかなか身に付かないという側面もあるかと思っています。

**松永** 例えば薬疹は、時には容態が急変して致命的になります。受診した人の中から、危険な兆候のある人をいち早く発見して、すぐに医師に報告するのも看護師の重要な役割です。

## 皮膚疾患ケア看護師を目指す人へのメッセージ

最後に皮膚疾患ケア看護師を目指す方々へのメッセージをお願いします。

**久野** 認定を受けるには、症例報告を作成することが必要です。症例報告の作成は、自分が指導した患者さんにもう1度向き合い、反省したり自分をほめたりしながら振り返ってみる良い機会になると思います。それにより、スキルアップが可能になり、もっと多角的に患者さんや後輩看護師に指導できるようになるでしょう。認定の取得は、ずっと同じ自分でのではなく、もう少し先に進めるチャンスになると思います。